

やっていることは 真逆のことばかり 見果てぬ夢、 自立国家への模索

インド・ビジネス・センター代表 島田 卓



モディ首相

異例の激!独立記念日スピーチ だが、コロナ感染者は世界2位に

毎年8月15日、インドの首相はデリーにある、ムガル帝国第5代皇帝シャー・ジャハーンの居城であったレッド・フォート（赤い砦）から国民に向けたメッセージを発する。

1947年、初代首相のネルーが200年近くに及んだイギリスの植民地からの独立宣言をしたその日だ。しかし、独立後、インドに残されたものは、貧困・文盲・カースト制度や宗教的反目、そして地方分裂等であった。それだけに、歴代首相が独立記念日スピーチで強調してきたのは、政府（政体）、市民、農民、夢、若者や自由といった言葉であった。

それが今年は一変した。モディ首相が86分という長演説の中で、32回にもわたり口にしたのは“Self-Reliance（自立）”と“Citizens（市民）”。次いで“コロナ”が25回だった。モディは13億人の市民に対し、“自立”を、ヒンドゥー教で言うマントラ（スローガン）にしようと呼びかけた。

ソーシャルディスタンスを守るため限られた人数の招待客の中には、コロナ感染から回復した約1500人がいた。モディは彼らを“コロナに打ち勝った市民”と呼び、献身的

な治療を重ねる医療従事者を筆頭に「一丸となってコロナに立ち向かう市民の姿は、災禍を絶好の機会と捉えて、自立への道を歩み始めたインド共和国そのものだ」と檄を飛ばした。

まるで、塩野七生の『ギリシャ人の物語』に出てくる「言葉という武器だけで、怒りと不安を希望と可能性に変える」ペリクレスのようだ。だが、アテネ市民は、強烈なリーダーを認める一方で、何を成したのかを重要視する有権者であったようだ。

次々と突然に新政策や方針を断行するモディは卓越したストラテジーの立案者なのだろう。ただそのストラテジーが、果たして複雑なインド社会を融和させ、国全体としてあるべき姿、目指すべき方向にリードしているのかというと、はなはだ疑問だ。

昨年までネルー大学の教授をしていた友人は「唐突なロックダウンがインド社会をめちゃくちゃにした」とモディを非難する。露天商は日銭稼ぎができなくなり、期間工は失職し、生きていくために遠隔の地元へ帰らざるを得なくなった。もともと貧しい人たちは密集しており、その人たちをさらに動けなくするということが自殺行為だ。政府の指示がどうであろうが、早晩、動き回することは容易に

想像できたことだ。その結果、9月6日には1日で9万人を超す感染者が確認され、り患者総数も400万人を超え、ブラジルを抜き米国に次ぐ世界第2位となった。

もっと辛辣なのは元財務相のチダンバラム上院議員で、9月6日、インド有力日刊紙ファイナンシャル・エクスプレスのコラムで「経済指標に関する政府の欺瞞が中央統計局（CSO=Central Statistics Office）によって暴かれた」と暴露した。また、「現状の経済停滞は『神の成せる業（不可抗力）』とするシタラマン財務相は、政府の無策を言い繕っているだけのこと」と、手厳しい。

CSOの数値を見ると、2020年第1四半期（2020/4-6）の経済成長率はマイナス23.9%で、国際通貨基金（IMF）統計では、G20の中で最低だ。しかも、インド経済の下降基調はコロナ以前に始まっている。インド準備銀行（RBI: Reserve Bank of India: インド中銀）が8月25日に発表した年次報告書では、2年前のGDP率成長8.5%から過去8四半期で3.1%にまで低下している。モディが誇る「インドの経済成長は世界最速」は虚言だ。

それにコロナ禍が襲った。危機脱出のための財政支出はGDPの1.7%で、G20の平均12.1%に遥かに及ばない。元RBI総裁で、現シカゴ大学教授のラジャンは現地紙The Economic Timesに「マイナス23.9%は警戒警報だ。官僚は独善を改め、有効な政策を打て。この危機を乗り切るには、思慮深く積極果敢に動く政府が必要だ」と警鐘を鳴らす。

頼みの中国と衝突 何故か高い支持率の不思議

そのような状況下モディは、国境紛争に端を発した中国に対して「拡張主義とは断固として戦う」とし、「経済的自立」を勝ち取るためと称して中国企業排除の政策を打ち出している。さらに中国企業によるインド企業買

収等阻止を目的にした外資規制も発効させた。だが、インド経済の中国依存は明らかだ。2008年からの10年間でインドの貿易赤字は約5割増え、1,896億ドル。そのうちの最大赤字先が全体の16.3%を占める中国だ。しかし、中国依存から脱却する具体的政策は示すことができていない。国民への目くらましの「突然、唐突」手法の限界だ。

それでも、インディア・トゥデイ誌（India Today）が8月に実施した国民の意識調査（Mood of the nation poll）によると、モディの首相としての評価は、30%が「傑出（Outstanding）」、48%が良い「（Good）」と、78%もが支持している。

また、モディの人気度を4点満点とすると、ヒンドゥー教徒の平均点は3.13と高く、一方、イスラム教徒の評価は2.33と低い。カースト別にみると、低カーストほど評価が高く、上位カーストでは2.99と低くなる。

これまでモディの政策のうち、一番評価されたのが、イスラム教徒が多数を占めるインド最北部ジャム・カシミール州の自治権を暫定的に認めた憲法370条の廃止と、首都デリー準州に隣接するウツタル・プラデッシュ州のモスクがあったとされる聖地アヨディアに、ヒンドゥー寺院建立許可を最高裁から勝ち取ったことだ。結果、インド最大の面積と人口を有する同州首相で、ヒンドゥー至上主義者ヨギ・アディティアナートが最優秀州首相に選ばれている。ヒンドゥー優先だ。

なぜ国を分断させかねないモディの信認が衰えないのか不明だ。早朝のヨガに始まり、土日もなく深夜まで業務にいそしむ。記者会見は一方向的にしゃべりまくる。そこには他者を立ち入らせないムードが漂う。モディはヒンドゥー至上国家を創り出そうとしているのか、全ての宗派を超越した民主国家建設を目指しているのか、未だ誰も解き明かせないでいる。
(敬称略)